

そこに埋まるものはたしか 作 田辺剛

戦争が終わってそこに残ったのは焼けこげた瓦礫とほこりっぽい、焼けた土のにおいだけだった。遠くまで広がる焼け野原。もともとそこは静かな住宅街だったのだが、もはやそのことを明確に示すものはなくなっている。散乱する瓦礫と遠くに見える焼け残った森がせいぜい目印になるくらいだ。戦争が終わっても町の人は戻らなかった。政府はその町に敵が無数の地雷を埋めたと言い、人々が町へ戻ることを禁じたからだ。その町の静けさは、無音という静けさとして戻ってきた。

広い焼け野原には地雷撤去作業員のキャンプが点在していて、そのうちの一つのキャンプが今回の舞台となる。

客席と舞台とのあいだに張ってある赤い線は登場人物の安全を守る最後の境界線だ。舞台にはパイプテントが立っている。テントの外には安っぽいテーブルと椅子がいくつか。テーブルの上には水のタンク。

暗くなった舞台に差し込んでくるのは月の光だ。その夜は厚い雲が時おり流れる空なので、月の光は雲が月の下を通るたびにゆらゆらと揺れている。

男（男2）が紙にペンを走らせながら考えている。テントの奥には女（女2）がいる

が、外からは女の顔がよく見えない。女は男のことを見つめているようだ。

プロローグ 「トランポリン的で満月チックな詩とはなにか」

男2 (走るペンが止まって) うーん・・・おい。

女2 なに？

男2 いんのか。

女2 いるわよ。

男2 もうちょっと待ってな。

女2 待ってるじゃない。

男2 ああ、せやな・・・夜の闇が降ってくる あなたとわたしと そのあいだに
・・・夜の闇が降ってくる あなたとわたしと そのあいだに・・・「そのあいだに」
に、「そのあいだに」、「そのあいだに」・・・

月の光が大きくなる。

女2 きれいな。

男2 ……(書きながら) 「闇のなかへ消えて行くあなたの身体を」・・・

女2 満月？

男2 「細すぎる三日月は」・・・

女2 ねえ。

男2 なんや。

女2 ここから見ると、あれね。UFOでも降りて来そうな光よね。

男2 降りて来ません。

男は再び詩のことばを探しはじめる。

女2 きれいな。

男2 (ぶつぶつ言っていたが) よし、ちょっと聞いて。

女2 うん。

男2 「夜の闇が降ってくる あなたとわたしと そのあいだに 闇のなかへ消えて行く」・・・これ、だんだんとやな。(書きながら) 「だんだんと」・・・「夜の闇が降ってくる あなたとわたしと そのあいだに だんだんと闇のなかへ消えて行くあなたの身体を」・・・「だんだんと」、「だんだんと」・・・「だんだんと 闇にさらわれるあなたの身体を」・・・よし・・・(女2に) おい。

女2 なに？

男2 おお。

女2 だから、いるって。

男2 おお。

女2 信頼がないのね。

男2 そうやなくて。

女2 はいはい。

男2 ……続けんで。

女2 あなたが止めたのよ。

男2 自分……（と言いかけたが、取り直して男は詩を朗読しようとする）

女2 さん、はい。

男2 ……。

女2 え？ ああ。

男2 （読み出そうとする）

女2 どうぞ。

男2 ……。

女2 ちゃんというわよ。聞いているよ。

男2 そんなんじゃないくて……。

女2 うん。

男2 わざとか。

女2 ちょっと。

男2 ……今から詠むし、別に合図もいらんし。

女2 ああ、ごめんね。

男2 俺のタイミングで始めるし。

女2 はいはい。じゃあ、どうぞ。

男は調子が乱されてしっくりこないながらも、詩を朗読する。

夜の闇が降ってくる

あなたとわたしと

そのあいだに

だんだんと闇にさらわれるあなたの身体を

僕はここにとどめることができない

沈黙。

女2 うん。

男2 どう？

女2 ちょっと暗いんじゃない？

男2 まあ・・・そうやなあ。

女2 「闇」とか「消える」とか・・・

男2 「消える」はやめて、「さらわれる」や。

女2 光は見えないの？

男2 見えんなあ。

女2 満月なのにな？

男2 こっちは関係ないやん。

女2 ・・・どうして暗闇なの？

男2 うーん。

女2 あなた自身が暗いわけじゃないんでしょ。なんか嫌なことでもあった？

男2 嫌なことっていうか、そういうんはないけど。

女2 うん。

男2 ちよつと哀しい感じかな。哀しいってあっちの方、哀愁の「哀」。悲劇の「悲」じゃなくて。

女2 それってどう違うの？

男2 うん、泣き出すよりかは物思いに沈むみたいな。

女2 ああ、それって重いよね。沈むっていうのが。

男2 ああ、重い・・・。

女はうろ覚えに男の詩を口ずさんでみる。

女2 重いよ、やっぱ。

男2 重いか。

女2 もっと軽いのはどう？

男2 うーん。

女2 ハッピーなやつ。

男2 ハッピーなあ。

女2 トランポリンがあるじゃない。

男2 トランポリン？

女2 一瞬は沈むんだけど、けど沈めば沈むほど飛び上がらずにはいられないでしょ。ポヨヨンって。

男2 はあ。

女2 ボヨヨーン。

男2 (つられて) ボヨヨーン。

女2 うん。いつまでも沈んでは飛び、沈んでは飛びして、なんか色んなことがちっちゃくなっちゃうのね。

男2 はあ。

女2 そんな詩。

男2 どんな詩やねん。

女2 ねえ・・・わたし、あなたの詩が好きよ。閉じてはいるけど、その閉じられたなかの世界は静かで、純粹でどこまでも続いている。けどね、それはハッピーじゃないの。重いよね。それはそれで好きなんだけど、今のわたしはハッピーがいいの。軽やかになってすべてを肯定できちゃうような、そんなの。わたし自身、重くいろいろと思うんだけど、今はね・・・飛び出してみない？ その世界から。

男2 うーん。

女2 あと、満月ね。

男2 は？

女2 せつかくの満月なんだから、それっぽい感じもいい。

男2 満月？

女2 そう、満月。

男2 うーん。

女2 ちょっと注文多すぎ？

男2 いや、別に。

女2 あなたはどう思うの？

男2 え・・・せやなあ。

女2 趣味じゃない？

男2 よう分からん。なんとなくしか。

沈黙。

女2 ま、時間はまだあるから。ゆっくり探して。

男2 うーん。

男は自分の詩や女のことばを反芻しながら、ボヨヨンと言って飛んだりしている。

男2 ハッピー・・・満月・・・トランポリン・・・。(女に) おい。

女の返事はない。姿もない。しかし男は隣にいた恋人が眠ってしまったときのような反応で、動じずにいる。

男2 (つぶやくように) まだ出てこんわ、そんなハッピーなことば。

男はため息をつく。

第一章 「今日のバイトはやけにダルい」

舞台の上では地雷撤去作業員たちが自分の出番まで待たされているところだ。舞台には男が三人、離ればなれにいる。一人はテントの奥の方でギターをいじっている。一人は夢中になって本を読んでいる。そして最後の一人は双眼鏡を覗いて遠くを見ている。今遠くで作業をしている別の二人の様子がとても気になるようだ。

男1 あれ？・・・あ、あ、あ・・・うーん・・・うん？ うん？ いやいや、ちょっと。それはどうだ？

男1、後ろを振り返るが他の二人は何の反応もない。再び双眼鏡を覗く。

男1・・・だめだろ、そんなことしちゃ。何にも分かってないじゃん・・・危ないって、危ないって。爆発・・・

男3のギターが鳴る。素早く反応する男1。

男3（ギターに向かって）なんでやねん。

しかし男3は鳴らしてみただけでギターに夢中のままだ。男2も無反応。男1は再び

双眼鏡で遠くの二人を見る。

男1 (他の二人の気をひくように) いやあ、もっと慎重にしくちや、最近のなんかは特にあれなんだから・・・あれ？ 大丈夫かなあ、良くないなあ。

男2 おい。

男1 (元氣よく) はい！

男2 うるさい。

男1 ……え？

男2 (読んでいる本を見せて) これ読んでんねんか。読書ね、読書。

男1 はい。

男2 なんちゆうか、このお話の世界に没頭してんねんな。虜になってる言うてもええねんけど。

男1 何を読んでらっしゃるんですか。

男2 (無視して) こう・・・複雑に重なった物語の層がな、微妙に作用しあってて・・・実にうまいんよ、この作者。

男1 はあ。

男2 集中すんねん。せなあかんねん、分かる？

男1 集中ですか。

男2 自分、図書館とか行く？

男1 え、図書館ですか・・・週に三回は。

男2 ああ、行くんねや。週に三回・・・けっこう行くね。

男1 それほどでもないですけど・・・

男2 じゃあ、分かるやろ。

男1 ……なにがですか。

男2 (突然怒って) 自分、図書館行くんちやうんけ!

男3のギターが鳴る。

男1 (男3に振り向く)

男2 どこ見てんねん、アホか、こっち見んかい。

男1 え、はい。

男2 (興奮して) あ? 自分、図書館行くやろ、図書館行くんやったら、お前、図書館分かるやろ!

男1 (圧倒されて) はい。

男2 おう、ならええねん。

男2、読書に戻る。

男1 すみません・・・

男2 ……。

男1 それで、図書館というのは、その・・・

男2 (ため息) せやから自分な・・・

男1 はい。図書館は分かります。図書館は分かるんですけど、その・・・それで結局どういふことなんでしょう。

男2 よし・・・それやったらな、うん・・・(せき払いを一つ) 例えば、あなたが図書館で本を読んでいるとします。ほら、これ(と読んでいた本を渡す)

男1 漫画・・・。

男2 どうでもええねん、それは。んで、いいですか。あなたは本を読んでいます。ほら、読まんかい。

男1 はい。

男2 それはとても面白い本です。今までに出会ったことのないような、びっくりするくらい・・・

男1 「北斗の拳」

男2 面白い本です。夢中です。

男1 ……。

男2 夢中です。

男1 夢中です。

男2 周りはとても・・・？

男1 え？

男2 周りはとても・・・？

男1 静かです。

男2 はい。物音一つ聞こえま・・・？

男1 せん。

男2 はい。ところが、そこにチヨロチヨロとクソガキがやってきて騒ぎはじめました。とても迷惑ですね。

男1 はい。

男2 そしたら、あなたはどうしますか。

男1 そしたら？

男2 そのうるさいガキ。

男1 ……何もしません。

男2 なんでやねん。

男1 無視するから。

男2 そんなんでけへんやろ。うるさいねんで。

男1 それはそうでしょうけど。

男2 あかんやん。

男1 え、だって……

男2 うん。

男1 耳せんしてますから。

男2 ほお。

沈黙。男2、テーブルに向かって水をカップに注ぐ。

男1 で？

男2 なにが？

男1 耳せん、してますけど。

男2 ああ、そう。ちよつと、それ。

男1 はい。（と本を返す）で？

男2 ええねん、もう。

男1 なんですか。

男2 もう、ええって。終わり。

男1 終わり・・・ってどういうことなんですか。

男2 論理的なやつ、俺アカンねん。

男1 論理的って・・・。

男2 正直な話、なんか自分とはうまくやっていけへんと思う、悪いけど。

男1 いやいや、そんな・・・仲良くしましょうよ。せつかくの出会いなんだし、ほら、危ない仕事なんだしチームとして。

男2 別に危ないことないやろ。

男1 どうして、とてつもなく危ないじゃないですか。命にかかわるんですから。

男2 （鼻で笑って）そんな・・・

男1 あっ、あなたはどうなんですか、そういう時。

男2 もうええから。

男1 なんでやねん、とか怒鳴ったり？

男2 ……。

男1 僕も答えたんですから、答えてくださいよ。

男2 ……図書館嫌いやねん。

男1 は？

男2 外でしか本は読まへんねん。

男3のギターが鳴る。

男3 (ギターに向かって) せやし、その音ちやうやん。

男2 ……自分、ギターは？

男1 ちよつとだけなら。

男3 (ギターに向かって) つぶすぞ、こら。

男2 ……あいつな、そもそもチューニングが分かってないと思うねん。

男1 そんな感じですね。

男2 自分、教えたって。

男1 僕がですか。

男2 ギターのこと分かってんやろ。

男1 少しですよ、そんな……どういう人なんですか。

男2 見てのとおりや。

男1 (男3をジッと見る)

男3 (ギターに向かって) お前は詐欺師か。

男1 ……全然分からないんですけど。

男2 ミュージシャンとちやうどの？

男1 チューニングも分かってなくて？

男2 よろしく。俺はこっち(本)があるし。

男1 こっちって漫画じゃないですか。

男2 ケンシロウがピンチやねん。

男1 知りませんよそんなこと。それよりも、いいんですか。

男2 なにが。

男1 (作業中の二人を指して) あの二人です。心配じゃないですか。危険すぎるし。

男2 さつきから危ない危ないって、もしかして地雷・・・

男1 (双眼鏡を覗いて) あれ? ほらほら、なんか普通に歩いてますよ。ああ、ちょっと・・・飛ばない、飛ばない。(男2に) あの二人全然分かってないじゃないですか。

男2 何が?

男1 だから処理の・・・段取りですよ。

男2 それって地雷の話?

男1 なんですと?

男3 (テーブルのところまで出て来て) 俺のコップどれ?

男1 え、あ・・・。

男2 どれでもええやん、別に。

男3 そんなんあかんやん。三人いるところにコップが三つやで。あかんやろ、どれでもっちゅうのは。(男1に) 自分、今さつき飲んでたな。

男1 はい。

男3 どのコップ使ったん?

男1 え・・・その倒れてないんですけど。

男3 これね。(と男3は肩から掛けていたギターをテーブルのわきにおろす)

男2 (男1に) 地雷のこと？

男1 地雷じゃなかったら、なんなんですか。

男2 自分、知らんの？

男1 なんですか。

男3 おい。

男2 なに？

男3 自分のどれ？

男2 なにが？

男3 コップや。自分のはどれ？

男2 ……四番。

沈黙。

男3 (男2に) なめとんのか！

男2 (男1に) つっこめや！

男1 (とっさに) すみません。

男3 だから、どれやねん。

男2 じゃあ倒れてるやつ。

男3 二つあんねん。

男2 は？

男3 重なって二つあんな。どっち？

男2 上の方。

男3 上？・・・(と言いつつ上の方のカップをとる)

男2 上やで、上。俺が使うたんは。自分のは下やろ、逆。

男3 はいはい。

男2 なんでやねん。わけ分からんわ。

男3 自分嘘つきやし。

男2 ああ、なるほど・・・って嘘つきちゃうわ。ちよつと感じ悪いで、自分。

男1 どうしてこの人が嘘つきなんですか。

男3 ……自分、詩人なんやろ？

男1 え、詩人さんなんですか。

男2 「さん」をつけるな、「さん」を。まあ、そう言われればそやなあ。うん、詩人や。

男1 へえ。

男3 で、ことば使うて飯食うてんやろ？

男1 え、そうなんですか。趣味じゃなくてお仕事？

男2 まあ、そう言われれば、そうやなあ。かなり苦しいけど。

男1 へえ。

男3 詩集もだしてんねなあ。

男1 え、すごいじゃないですか。本出してるんですか。

男2 まあ、そう言われればそうやなあ。半分自費出版やけど。

男1 へえ。

男3 セヤからや。

男1 え、だからなんですか。

男2 なんでや。

男1 (男3に) は？

男3 (バシッと男2を指さして) 嘘つきや。

男1・2 全然意味分かんねえ。

男2 どういうことやねん、それは。

男1 何の説明にもなってないじゃないですか。

男3 嘘をつくのはことばだけや。音楽は嘘つかへん。

男1 なるほど。

男2 ちよつと待て。

男1 はい、どうぞ。

男2 そりゃ、嘘はことばでつくもんやけど、詩は嘘ちやうで。真実やで。真実のことばを詩いうんや。

男1 ああ、それもそうだ。(男3に) そのへんはどうなんですか。

男3 詩も小説も結局はつくりもんの世界や。

男1 あ、痛。痛いところをつくなあ、(男2に) それで？

男2 は男1の顔面をつかむ。

男1 痛い、痛い。

男2 そういう話をしてんのとちゃうねん。別にええねん、それは。とにかく、俺の
コップは上。お前のは下。

男3は男2の言うことを無視して上のカップを取り、水を注いでテントの奥へと戻っ
て行く。

男2 勝手にせえ。俺は別に困らん。

男3 ぬるっ。

男2 (男1に) おい。

男1 はい。

男2 あいつにチューニング教えとけ。

男1 いや、だからですね・・・

男2 聞くに堪えん音楽は真実以下や。(男3に) おい、その音楽家。こいつがギ
ターの弾きかた教えてやるって。

男3 (パッと目を輝かせて) ほんま？

男2 教えてもらったらええがな。ドーンと。

男1 教えるとかはね・・・

男3 (近づいて来て) 頼むわ。全然出る音ちゃうねん。壊れてんのかな。

男1 いや、壊れてるわけじゃなくて。

男2 チューニングをせなあかんねんて。

男3 チューニング？

男2 音を出す準備や。

男3 へえー。

男2 あとはそいつが。

男1 あ、まあ。ちよつとだけ。

男2 またまた、謙遜しちやつて。(男3に) ほら。

男3 おう。それでなんやねん、そのチューニングつて。

男1 え、その・・・つまり、この弦をですね、コードを押さえたときに・・・

男3 そうやねん。全然違う音が出んねんな。弦があかんの、これ。

男1 (否定して) んーん。そうじゃなくて、違う音が出てしまうんですよ、それは別にいいんです。

男3 けど、そんなんやったら弾けへんやん。

男1 そう。だからそのためにも準備がいるわけです。ここのねじをね・・・

男3 チューニングやろ？

男1 はい。

男3 それは分かったし、はよ教えろや。

沈黙。男1のため息。

男3 なんや、どうかしたか。

男1 いえ、それです、ここにネジがあつて……。

男3 せやねん、これはなんなん？

男1 ええ……と、これで弦を引っ張ったり、ゆるめたりしてるんですけど、これを回すと音が変わりますから。

男1、ねじをまわしながら音が変わるのを聞かせる。

男3 そんなことは分かってんねん。

男1 はあ？

男3 で、チューニングってなんやねん。

男1 だからこのネジで弦を絞めたり、ゆるめたりして音を調節するんですよ。

女1がテント奥の入り口から入ってくる。両手には水が入った大きなペットボトル。

女1 (入り口近くにいた男2に) あ。また勝手に持って来てる。ですから、事務所の本を勝手に持ち出さないでくださいって何回も注意してるじゃないですか。どうして言うことを聞いてくれないんですか。

男2 なにしてんの？

女1 わたしのことじゃなくて、その本。事務所のですよね。

男2 「北斗の拳」やけどな。

女1 「北斗の拳」でもなんでも、ダメなものだめなんです。というよりも、勝手に

に事務所に入らないでください。

男2 はいはい。

女1 返してください。

男2 ケンシロウ、まだピンチのままなんやけど。

女1 知りません、そんなの。

男2 はいはい・・・(渡して)はい。

男2 は本を差し出すが、女1は両手がふさがっててその本を受け取れない。

男2 先にそれ、片付けたら？

女1、無言のままテーブルへ行き、水のタンクに持って来た水を注ぎ込む。

男1 すみません。

女1 なんですか。

男1 あとどれくらいでしょうか。

女1 なにがですか。

男1 交代まで。

女1 知りません。あの人たちが戻って来たらじゃないですか。

男1 ああ、そうですか。

男3 それ、氷も入れてくれんの？

女1 は？

男3 氷。もう溶けてしまってるねんけど。

女1 氷は一日一回、朝に入れることになってるんですけど。

男3 けど、ぬるいねんで。

女1 どこもいっしょですから。

男3 どこもいっしょなんやったら、なんかとかしたらええやん。砂も混じってるし、飲めんわ、それ。

女1 無理に飲んでもらわなくても結構ですから。

男3 ……。

遠くから乾いた破裂音が響いてくる。全員が一気に緊張する。

男1 なんですか。踏んじやったんじゃないですか。(と慌てて双眼鏡をかまえる)

男2 も前へ出てくる。無言のまま全員野原を見つめる。

男2 爆竹ちやうん？

男1 そんなわけではないでしょう。

沈黙。

女1 煙が立ってませんか、どこかに。

男1 あ、いや・・・見えないです。

男2 なんの？

女1 爆発すれば立つでしょ、煙が。

男2 何が爆発すんねん。

男1・女1 地雷に決まってるでしょ。

男2 ああ。

男1 今さっき言いかけてましたけど、どういふことなんですか。危なくないって。

男2 (女1に) 地雷って本当は嘘なんやろ？

女1 は？

男2 なんか、人が近づかへんように、嘘ついてんのとちゃうん？

男1 なに言ってるんですか。今の聞こえたでしょ、音。事故ですよ、あれは。人だ
って毎日何人も死んでるんですし。

男3 見たことあのか。

男1 え？

男3 自分、人が実際に吹っ飛んだのを見たことあのか。

男1 いや、実際には。

男3 俺もないねん。人から聞くだけやねん。

男2 そうそう。

男1 だからなんなんですか、嘘だつて言うんですか。

男2 たまーにああいう音は聞くねんけど、けど、煙は立ってないやろ。ほら。

男1 (双眼鏡を覗き込む)

男2 そうやねん・・・

男1 けど、こんな状況で嘘ってことはないんじゃないですか。

男2 本当かどうか分からへん。

女1 あなたはこちらの人ですか。

男2 え、ああ。

女1 ……いろいろと噂はありますけど、惑わされないほうがいいですよ。(男1を指して) 遠くから来てくれてる方もいるんですから。

男1 僕は別に好きで来てるので・・・。

男2 自分、やっぱりあれなん？ ボランティア？

男1 はい。

男3 なんや。

男1 え、どうかしました？ 自己紹介のときにそう言いましたけど。

男2 すまん、聞いてなかった。

男1 はあ。

男2 やっぱ、あっちの方ではテレビとかでやってんの。

男1 やってるというか、それだけです、話題は。

男2 (無感動に) あ、そう。

男1 僕もそれを見て・・・あと新聞もですけど、居ても立ってもいられなくなつて・・・。

男2 ありがとうね。

男1 まあ、どれだけ役に立てるかは分かりませんが。

男2 嘘やったかもしれへんしね。

女1 そういう水を差すようなことを言わないでください。

男2 はいはい。

女1 だいたい、あんまり変なことばかり言っていると、勤務態度の評定、下がっちゃいますよ。

男2 (ムツとして) なにそれ。

女1 仕事を欲しがっている人はいくらでもいますから。

男2 なんでやねん、金のためにやってるんちゃうわ。

女1 じゃあ、ボランティアでやってもらえるんですか。それだったら、上の方にそう伝えておきますけど。

男2 ……。

女1 現場を混乱させるようなことは言わないでください。

女1 は去って行く。男2は黙っている。

女1 (去り際に) 今度持ち出したら……あれですよ。

沈黙。

男3 あれってなんやねん……じゃあ、チューニング。

男1 (男2を気にしながら) え・・・あ、はい。

男3 このネジを締めたり緩めたりすんねんな。

男1 はい。

男3 全部？ (と言いながらネジを次々に緩めていく)

男1 (男3の行動に気付かず男2に) 噂を確かめようとしたくらいで辞めさせたりしないですよ。

男2 なにが。

男1 それじゃ、不当解雇ですから。

男2 なんや、お前は弁護士か。

男1 え、いや・・・目指してはいますけど、まだ勉強は始めたばかりで。

男2 やっぱりや。

男1 え？

男2 やっぱ、自分とはうまくいかへんわ。

男1 どうしてですか。

男2 確信したわ。ちゆうか、ちやうねん。別に辞めさせられるとかちやうねん。

男1 は？

男2 あのアマ、読みかけやのに持って行きよった。

男1 あ、本。

男2 しおりをはさむ間もなく・・・ええか、何が問題かちゆうとな。

男1 はい。

男2 あれが第何巻やったか見てなかったことや。

男1 ふーん。

男2 全部で二十七巻もあんのに、くそつ、探し出すのに手間がかかる。

沈黙。

男1 (男3に気付いて) 何してるんですか、弦はずれちゃうじゃないですか。

男3 え？

男1 ギター、バラバラですよ。ちょっと貸してください。

男1、男3からギターを取り上げる。

男3 ……自分、うまいの？

男1 (ムツとして) なにがですか。

男3 ギター。

男1 ちょっとかじっただけですが。(ギターの大変さに) ああ、もう。

男3 自由に弾けんの？

男1 ……自由にとってどういうことですか。

男3 思った音が、思ったように弾けること。

男1 一通りコードは覚えましたが。まあ、今は忘れてますけど。

男3 そういうことちゃうねん。

男1 はあ。

男3 そのギターが自分の身体みたいになるやん。

男1 えーっと・・・それはなんですか、ギターと身体が合体するとか、そういうこと？

男3 なんで超合金やねん。

男1 いや、そんなこと言ってないですけど。

男3 (男1を無視して) 楽器に触ってるっていう感覚がなくなってくんねん。字を書くときに、鉛筆に触っている感覚ってないやん。鉛筆に触っているを通り越して紙の感触やん、伝わっくんのは。

男1 はあ。

男2 (水を飲んで) これマジぬるやなあ。かなんなあ、こんなん。

男3 ギターが鳴ってるんじゃないかって、指先から音が出る感じやんか。

男2 マジで？

男3 は？

男2 そんなことほんまにあんの？ なんか嘘くさいんちゃうん。

男3 嘘ちゃうわ。

男2 だいたいそんなん、分かんのか？ ギター始めたばかりちゃうん？

男3 せや。そう言うてたんや、これくれた奴が。

男2 なんや受け売りかい。

男3 ……ちよつと自分、感じ悪いで。けんか売ってんの？

男2 別に。

沈黙。

男1 ちよつと、やめましようよ。もうすぐ作業も始まるんだし、チームワークなんですから。こう、もうちよつと・・・

男3 断る。

男1 いや、断れないですから、もういっしょですから。

男2 俺も断る。

男1 じゃなくて、僕に断ってもらっても意味ないですから。

男2 自分な、言うても新入りなんやしもう少し周りを見る。

男3 は？

男2 ここでギター弾こうがなにしようが勝手やけど、もうちよつとまともに弾け。チューニングくらい知つとけ。

男3 だから今教えてもらってるやん、ええやんか、それで。

男2 ギターをもらったときに教わつとけつちゆう話や。

男3 そんなん関係あるか、自分に。

男2 おおありじや。

男3 なんでやねん。

男1 分かりました。はい、提案です。

男3 断る。

男2 俺も断る。

男1 断るとか断らないとかいう話じゃなくてですね・・・そうしたら、もう僕がチ

ユーニングしておきますので、しばらくは僕がやってあげますから。

男2 そんなん当然やん。

男1 え？

男2 こいつ覚え悪いねん、だから覚えられんかってん、そうやろ。

男3 アホか、そんなんちやうわ。

男2 (男1に) 自分したったって。あかんと思うわ、ことばで教えても。

男3 つくりものことばならな。インチキやし。

男2 なんやと。

男1 はいはい、(野原を指して) ほら、あれ。あの二人帰ってきてますよ。交代の準備しましょう。

沈黙。

男1 とりあえず、今日はこれ、僕がやっておきますから。作業が終わったら、また教えます。

男3 おう・・・じゃあ頼むわ。(と奥に向かおうとする)

男1 あ、ちよつと、どこ行くんですか。

男3 準備やろ。トイレや。

男1 ああ。

男2 あ、俺もトイレ。(と駆け出していく)

男3 あ。(と男2につられて駆け出す)

先を争うように二人は駆けて行った。間もなく、その二人とすれ違いで女1が入ってくる。

男1 あ、いいですか。

女1 はい。

男1 配置替えとかがってできるんですか。

女1 は？

男1 なんか・・・がんばってるんですけど、馴染めそうにないんですが。

女1 あの人たちがなにかしました？

男1 いや、そういうことではないんですけど、ちょっと合わないっていうか・・・いい人なんでしょうけど・・・もしできれば。

男3 悔しそうに戻ってくる。

男3 ほんま、ムカつく。

女1 (男3に) ちょっといいですか。

男3 なんで便器壊れてんの？

女1 便器？

男3 一つしか使えへんねんか。いつ直るん？

女1 ああ、あしたまでには。

男3 絶対あいつ、わざとやわ。ムカつく。

女1 それよりですね。

男3 なに？ 今、それより大事なことって俺にはないねんけど。

女1 このお仕事は危険なわけです。

男3 は？

女1 事故にあって死ぬ人も大勢いて、チームワークが命に関わるんですから、くれぐれも人と揉めたりとかしないでください。

男3 もう、遅いわ。揉め揉めや。

女1 ……(男1に) 分かりました。検討しておきます。

男1 お願いします。

男3 なんの話？

女1 ひとつお伺いしたいことがあるんですけど。

男1 はい、なんでしょう。

女1 資料を頂いたんですが、これで間違えはないですか。(とファイルを見せる)

男1 今朝僕が出したものですよね。

女1 はい。

男1 訂正はないですけど。

女1 大学生。

男1 はい。

女1 この、あなたのサークルなんですが、「社会問題研究会」？

男1 はい。

女1 ボランティア活動を中心に行っているということですけど、その他にはどんな活動を。

男1 その他ですか。

女1 ええ。

男1 最近はやっぱり、こっちの方に来て復興のお手伝いですけど。

女1 戦争中は？

男1 え・・・一応、反戦運動を。

女1 (記録しつつ) どの程度ですか。

男1 どの程度というと？

女1 デモに参加したとか、もっと過激だったとか。

男1 いや、デモには参加しましたが、過激なことにはしてないです。結局なにもできませんでしたけど。

女1 (記録しつつ) そうですか。

男1 それがなにか。

女1 いえ、ちよつとここの部分が、漠然としていたので。

男1 ああ、そうですか。

女1 ありがとうございます。(立ったまま落ち着かない男3に) なにしてるんですか。

男3 あ？ いや、別に。

男1 座ったらどうですか。

男3は椅子に座る。女1は出て行く。

男3 チューニングは？

男1 もうちょっとで。

男3 すまんな。

男1 いえ。

男3 しかし、あいつ、ムカつくわ。

男1 たまたまですよ。

男3 いいや、絶対わざとや。あんなタイミングでおしっこ行きたくならへんもん。

男1 いや、ないことはないでしょう。

男3 顔がにやけてた。

男1 ああ、そうですか。けど、なんか嬉しいことでもあったんじゃないですか。

男3 せやから、あれやん。俺より先に行けたからやん。

男1 ……なるほど。

男1はギターを鳴らしてチューニングをする。男3のそわそわは少しずつ大きくなっ
ていく。

男1 (しかし沈黙にたえきれず) ああっと、誰からもらったんですか。

男3 なにが。

男1 このギター。

男3 ああ、疎開してたときにそこで知り合った奴から。

男1 そうなんですか。

沈黙。

男1 (沈黙にたえきれず) ええっと・・・

男3 (男1と重なって) そいつが・・・

男1 あ。

男3 なに？

男1 いや、なんでも。

男3 なんや。

男1 え、なんですか。どうぞ。

男3 疎開は、ど田舎の学校なんやけど、そいつはな、いつつも夜になると体育館から抜け出してどこか行きよんねん。で、俺、保安係やったしな。

男1 なんですか、保安係って。

男3 やっぱ盗みとかあるやろ、人多かったし。自警団みたいなのがあってん。あと、スパイな、スパイ。

男1 はあ。

男3 で、そいつの後をつけて行ったら、グラウンドの隅っこまで行って、そこに隠しててんギターを。

男1 どうして。

男3 体育館やしな、潰されるかもしれんし、いつ盗まれるかもしれんし。まだ外の方が安心言うてた。

男1 へえ。

男3 で、聞かしたる言うから、聞いててな。ギターってこんな音がすんねやってめっちゃ衝撃でな。

男1 はい。

男3 それから毎晩。そのうちにちゃんとボディーガードしたるからってそれ条件に、昼にみんなにも聞かせてやって。

男1 その人が言ってたんですか、今さっきの話。

男3 せや。それで戦争が終わって、別れる時にもらってん。そいつに。

男1 大切なものじゃないんですか。

男3 やねんけど、ええわ言うてた。離ればなれになった彼氏を探すねんて、外国行つて。

男1 彼氏？・・・その人、女の人なんですか。

男3 そう、女やねん。いつまでかかるか分からんし、かさばるから、預かっていてつて。

男1 なんかサバサバしてるんですね。

男3 全然、女らしくなかった。ちゆうか、男やな、ある意味。

男1 なるほど。

男3 で、そいつはな、ギター弾いててると世界とつながんねんて。

男1 つながりますか。

男3 自分も、そんなん？

男1 だから、僕はちよつとだけ趣味程度でやってたって言ったでしょ。そこまでは全然。

男3 そうなんか。全然あかんやん。

男1 それはそれで僕の勝手でしょ。その人と比べないでください。

男3 は先ほどからそわそわしている。

男3 (我慢も限界に近づいて) ああ。

男1 なんですか。世界とつながってるんですか、それも。

男3 せやし、おしっこ。ダム限界やねん。なにしてんねん、あいつは。

男1 ああ、そうですか。

男2、悠々と戻ってくる。

男2 お待たっせー。

男3 絶対にしぼく。(とトイレへかけて行く)

男2 なにあれ。

男1 ずっと待ってたんですよ、トイレ。

男2 え、どして？

男1 壊れてるらしいです。一つしか使えなくて。

男2 ああ、そう。言うてくれたらええのに。

男1 あの・・・正直言つてすごく不安なんですけど。

男2 便所？

男1 そうじゃなくて、こんなぎすぎすした感じで作業は無理だと思うんです。

男2 それ・・・

男1 (男2が言いかけたのをさえぎって) あなたは、地雷なんてないと思ってるかもしれませんが、別に確証があるわけじゃないでしょう。

男2 ま、それはそうやけど。

男1 だったら、あるかもしれない。

男2 まあ。

男1 実はなかったということでも、用心は無駄じゃないと思うんです。

男2 ……分かった。

男1 一人のミスでチーム全滅つてこともあり得ますから。

男2 せやな。

サイレンの音が響く。

男2 ま、けど、明日からやな。

男1 え？

男2 終わりや。今のサイレン、終わりの合図やねん。

男1 そうなんですか、まだ何もしてないですよ。交代じゃないんですか。

男2 明日は俺達からやる、たぶん。(と出て行くこうとする)

男1 ……これどうしましょう。

男2 置いといてええんちゃう？

男1 大丈夫ですかね。

男2 チューニングは？

男1 できました。

男2 けど、どうや、チューニングも知らんと、どうすんねん。そんな我流でいつになつたら曲弾けんねん。

男1 なんかいろいろと思入れがあるらしいですよ。

男2 なに？

男1 よく分からないですけど。エピソードとか。

男2 そう。自分、弾けんの。

男1 いや、まともには。

男2 なんか弾いてみて。

男1 無理ですよ、そんな。

男2 うまくななくてもええし。

男1 はつまりながらもなにかのメロディーを奏でる。男3が入り口のところでじっと聞いている。

男2 (男3に気がついて) おお。

男1 (弾くのをやめて) あ、ほら、ギターのチューニングできましたよ。

男3 それさ・・・

男1 はい。

男3 なんて曲？

第二章 「恋人が欲しがるものを理解するためには」

暗闇のなかからギターの音が聞こえてくる。弾いているというより、触っていると
いう感じで適当な音が並んでいる。だんだんと舞台は明るくなる。そこはふたたび月
の光に包まれている。ギターを鳴らしていたのは男2だった。女2はそばで男2を見
ている。

女2 無理なんじゃないの。

男2 (ギターに集中している)

女2 あなた、音感もリズム感もまるでだめじゃない。

男2 まるでだめってこともないやろ。

女2 カスタネットも叩けないくせに。

男2 叩けるわ、そんならい。アホか。

女2 じゃあ、ほら。

男2 なに。

女2 お手を拝借。

男2　　なんで。

女2　　わたしのやるとおりに叩いてみて。手。

女2はウンパ、ウンパの簡単なリズムを手で叩く。

女2　　はい。

男2　　なに？

女2　　やってみなさいよ。

男2　　なんで。

女2　　これくらいはできるでしょ。

男2　　当たり前でしょ。

女2　　うん。

沈黙。

女2　　はい。なにしてるの。

男2　　なにが。

女2　　やってみせてよ。

男2　　なんで。

女2　　できるんだったら、いいじゃない。ちょっと聞かせてよ、あなたのリズム。

男2　　わざわざするほどのことでもないやろ。

女2 意味が分からないわ。できないなら、素直に認めなさいよ。

男2 ええがな。

女2 なにがよ。

男2 よし、分かった。じゃあ、これをやろう。大切にしいや。

女2 いらぬから。

男2 遠慮するなって、プレゼントやプレゼント。もらえるもんはもらっとけ。

(とギターを女に押し付ける)

女2 逃げてばっかり、

男2 さあ、じゃあ、集中するかな。静かにな。

女2 はいはい。

男2 えー、今夜は満月でひとつ。

女2 満月でひとつ。

沈黙。男はゆっくりと詩を口ずさみはじめる。

僕が途方にくれる理由はこうだ

太陽の時間に全ては無になった

かたちあるものは残像となり

かたちなきものは風に連れ去られ

ひとつの歴史は終わった

だからだ

僕がさらに途方にくれる理由はこうだ

夕日が沈んで月の時間になっても彼らは蘇らない

かたちあるものの残像も

かたちなきものにおいも

土のなかに埋もれるばかりで

月夜の静けさは増すばかり

だからだ

静けさよ

世界は月の光でがらりと変わった

舞台は整った

なのに

存在は存在したという記憶に堕ちて

哀しい

沈黙。

女2 うん。

男2 どう？

女2 どんどん沈んでいってるのね。

男2 せや。

女2 土に還っていくわけ。

男2 そうそう。なんか・・・

女2 しばらくすぎなんじゃない？

男2 え？

女2 (野原に目をやり) ほとんど現実描写でしょ、それ。

男2 そうか？

女2 うん。それでじゃあどうしようみたいなところが全くないでしょ。哀しみに満ち満ちてる。哀しいってあっちの方ね。哀愁の「哀」。悲劇の「悲」じゃなくて。

男2 けどな。

女2 うん。

男2 簡単じゃないやん。

女2 そりゃそうよ。

男2 すぐにケロっとハッピーちゆうわけにはいかんやろ。

女2 違うわよ。

男2 なにが。

女2 そういうことじゃなくて・・・。

男2 うん。

女2 ケロっと忘れるなんて無理に決まってるじゃない。記憶を失うってことなら別だけど。忘れるなんてできないわよ。

男2 じゃあ、どういふことやねん。

沈黙。女はギターを触って鳴らしてみる。

男2 (エイライラして) 俺には分からん。トランポリンとか、軽いとか、ハッピーとか。

女2 怒ることじゃないでしょ。

男2 怒ってへんわ。

女2 怒ってるわよ。

男2 どこがや。

女2 その辺。

男は息を吸い、自分を落ち着かせる。女はギターを鳴らしている。

男2 ……俺は哀しいと思うねん。俺だけやなくて、別に代表になってるつもりやないけど、こんな時やし誰でもおんなじやと思うねんな。

女2 うんうん。

男2 だから自然とそういうことばが出てきてしまつて、それは嘘じゃないねん。

女2 うん。

男2 逆に、なんでそんなにハッピー、ハッピーって言えんの？

女2 哀しみ抜いたからでしょ。

男2 は？

女2 哀しくて哀しくて、馬鹿馬鹿しくなるほどに哀しみ抜くとね、馬鹿馬鹿しくなるのよ。開き直りじゃなくてね、乗り越えられたわけでもなくてね、ただ哀しみに沈むのをやめてハッピーであろうとするのね。

男2 うん。

女2 だから、むしろ哀しみに哀しむほどに哀しめば・・・

男2 え？ 哀しみに哀しむほどに？

女2 哀しむこと自体が哀しく思われるくらいに哀しめばってこと。

男2 はいはい。

女2 トランポリンよ。

男2 宙に浮く。

女2 沈めば沈むほどに、高く舞い上がるでしょ。

男2 哀しみが足りひんということか。

沈黙。女はギターを鳴らす。

女2 新興宗教じゃないのよ。悟りを得られないのは修行が足りないからというわけではなくてね。哀しみが足りるとか足りないということではなくて。

男2 じゃあ、なに。

女2 うーん・・・がらりと変わることに。

男2 はあ。

女2 だんだんとじゃなくてがらりと、そのきっかけが何であるかはいろいろだけど、

発想とか視点のおおもとが変わっちゃうこと。

男2 発想の転換？

女2 そう。

男2 やったら、そう言えや。分かりにくいわ。そういうことか。

女2 スタートはね。その後はまた違うかもよ。わたしの考えてることと。

男2 まあ、それはまた、追々。

女2 はいはい。

沈黙。

女2 (野原を見て) どのへん？

男2 あのへんか。

女2 見当たらないわね。

男2 なんにもないしな。

女2 あの森だって半分くらいなくなっちゃったんでしょ。

男2 あ、せや。やったら、もうちよつと先やな。

女2 先って？

男2 もうちよつとあのへん。

女2 ……気が遠くなるほどのあいまいさね。

男2 「光をたどってできるだけ高く」……

女2 え？

男2 足下しか見んと、見上げてなかったんかな。

女2 分かってきた？

男2 まだ、全然。

女2 困ったわね。

男2 困んのかい。

女2 まあ、あなたはあなたの自由に。

男2 見捨てられてる。

女2 そうじゃないでしょ。

男2 分かってるわ。

女2 ……どうするの？

男2 探すに決まってるやん。

女2 なにを？

男2 埋まってるもの。

女2 答えになってないわ。

男2 だって何も持って行かんかったし、あるとしたら全部あんねん、なにもかも。

女2 それでも、もうちよつと目当てのものを絞ったら？

男2 まずはそこにたどり着いてからやな。そしたら考えよう。

女2 それもそうね。それでどうやって探すの？

男2 地道に。

女2 それも答えになってないわ。

男2 手がかりないし、そうするしかないやん。あ、けど、とりあえずコンビニの跡

を見つけることかな。近所にあつたやろ？

女2 うん。

男2 それ見つけたら少しはましなんちゃうん？

女2 時間かかりそうね。

男2 それはしゃあないやろ。なにもないんやし。

女2 いつまで探すの？

男2 いつまでも。

女2 やっぱり答えになってないわ。

男2 だって他にすることないし・・・多分、見つけたときに分かると思うねん。

女2 なにが。

男2 俺が今どこにいるか。

女2 生まれ育つた我が家の跡でしょ。

男2 ちゃうわ。

女2 は？

男2 我が家の跡を見つけてな、焼け残ったものも出てきたりすんねん。

女2 うん。

男2 それが例えば、あつたことさえ忘れてるようなものだったりするやろ。

女2 例えばね。

男2 そう。すると、こんなもんもあつたなあつて、その頃の自分を見つけるわけ。

女2 あなたらしい。

男2 なにが？

女2　なんかセンチメンタルな感じが。

男2　誤解すんなよ、別に思い出にひたるわけちゃうしな。

女2　そうなんだ。

男2　その頃の自分を見つけるやる、それで今いる場所との距離をやな、確かめんねん。

女2　今いる場所との距離。

男2　そう。たとえば自分からもらった手紙を見つけるとするわな。

女2　取ってたの？

男2　え？

女2　そんなもの、まだ持ってたの？

男2　（急に恥ずかしくなって）・・・そうじゃなくて、あつたとしたらや。

女2　あつたとしたらね。

男2　そう。そしたらその頃二人で考えてたこととかを思い出すやる。忘れてた己を見つけるわけ。

女2　うん。

男2　それで、その頃から変わり続けてきた今を確認すんねん。

女2　けどあれよね。

男2　なに？

女2　悩んでる今のあなたと比較できるようなものが出てくればいいけど、どうでもいいものだと嫌よね・・・ぶら下がり健康器とか。

男2　それは・・・

女2 ぶら下がってた時の自分思い出してもね。

男2 それは祈るしかないな。

女はギターを鳴らす。

女2 ……昔のものより新しいものを探せばいいのに

男2 だからあかんねん、お前は。

女2 (ムツとして) なに？

男2 新しいもんばっかりに目つけてもあかんねん。

女2 とても前向きじゃない。

男2 それが本当に前なんかっちゅう話や。俺はええねん、今は新しいもの見つけるより、再発見や。それができるどうかやな。

月の光が大きくなる。

女2 だから暗いのよ。

男2 しゃあないやん、それは。

女2 後ろを振り返ったまま歩いてると、こけるのよ。

男2 分かっとなるわ、それくらい。

女2 じゃあ、いいわ。

男2 多分、軽く舞い上がるのはな。

女2 うん。

男2 踏み切る場所が見つかったからやな。

女2 そんなものなの？

男2 そんなもんや。

女2 そう。

男2 時間かかんで、せやし。

女2 見つかるというわね。

男2 せやな。

女2 じゃあ、重力から自由になる詩をひとつ。

男2 よし。

男は再び考えはじめる。女は「星に願いを」をハミングカラララで歌う。

第三章 「詩人と音楽家の相性が悪ければ世界は存在しなかった」

サイレンの音とともに夜が明ける。次の日、昨日出番のなかった男たちは朝から作業に出ていて、ちょうど今昼休みになったところだ。太陽の光は、照らされる大地の上で何が起ころうがまったく関係なしに、今日も強い。

舞台には男3が椅子に座ってギターを弾いている。テーブルにある譜面を見ながら以前よりもその音はそれらしく響いている。男2が入ってくる。片手には本。

沈黙。男2が水を飲もうとすると、遠くから乾いた破裂音。二人は音のするほうへ目を奪われる。

男2 やつぱり、音だけや。

二人に会話は無い。男3の拙いギターの音だけが響いている。そこへ男1が入ってくる。男1は作業用のフルフェイスのヘルメットをかぶっている。正確に言うと、脱げないでいる。

いつものことだが、今日は作業をしたこともあって特にのどが乾く。男1もヘルメットをかぶってさらに暑い様子で、水を飲もうとカップを手に取る。しかし男1はヘルメットが邪魔で水が飲めない。

男2 (男1に) おい、こぼすぞ。

男1 あ、はい。(とあきらめずにまだ飲もうとする)

男2 こぼれる、こぼれる、こぼれる。たれてるやん。

男1 すみません。

男2 そんなお行儀の悪い子に育てた覚えはないねんけど。

男1 え？

男2 「え？」じゃなくて、つつこめや。

男1 すみません。

男3 あーっ、楽譜濡れてるやん、なにしてんねん。

男1 すみません。

男2 自分、そんなんでコップの水飲めへんやろ。便所の、手洗うところで飲んだら？

男1 あそこ消毒液なんです。水じゃなくて。

男3 じゃあ、飲むな。

男1 ……。

男2 そういうことを言うなや。自分、仮にもお師匠さんやで、ギターの。

男3 こんな宇宙飛行士みたいなんに教えてもろうてない。

男2 ひどい弟子やな。

男1 (ヘルメットを脱ごうとしている)

男2 あんまり無理してると、またゴキって変な音すんで。…ストローは？

男1 え？

男2 食堂、ストローとかあるんちゃう？

男1 あ。(と駆けて出ていく)

遠くから乾いた破裂音。男2と男3は野原に目をやるが、緊張感は薄い。

男3 (ギターをおろして) 自分、楽譜読める？

男2 読むだけなら。

男3 そう。(楽譜とペンを取り) 悪いんやけど、これ書いてくれる？

男2 なにを？

男3 音符の読み。

男2 ちよつと、待て。

男3 なんや。

男2 書くって・・・読めへんの、自分。

男3 せやし、頼んでんねんけど。

男2 ひとつ聞いてもええか。

男3 なに。

男2 音楽の道を進むって言うてたな、前に。

男3 うん。

男2 それはあれやな、「道」言うても「通り」のこととはちやうねんな。

男3 なんで「通り」やねん。

男2 そうそう。ミュージシャンってことやんな。

男3 音楽家な、音楽家。

男2 で、どこまで分かってんの、音楽のこと。

男3 どこまでって？

男2 チューニング、知らんかったやろ。

男3 もう覚えたで。

男2 けど、あの宇宙飛行士に教えてもらってやろ。

男3 せや。

男2 楽譜が読めない？

男3 せやし、教えてって。

男2 (とりあえず楽譜とペンを受け取る)

男3 世界とつながりたいねん、これで。まだ始めたばかりやけど、これ持っていろんなとこ行って。

男2 そう。

男3 (野原を見て) まずはここからやねん。

男2 自分・・・もしかしたら、ここに住んでた？

男3 ……うん。

男2 どこ？

男3 小学校の裏。

男2 小学校の裏って、玉小？

男3 せやし・・・自分もここなん？

男2 オンボロ橋の近く。

男3 オンボロ橋か。

男2 今は川さえないけどな。

男3 ……そっか。

男2 ……そっか。

沈黙。遠くから乾いた破裂音。二人は今までとは違ったまなざしで野原を見る。

男2 自分、ほんまにいたか？

男3 いたっちゅうねん。

男2 聞いたことないで、自分みたいなのがいるって。

男3 そんなん分かるわけないやろ、ふつう。

男2 俺は知ってると思うで。

男3 なんで。

男2 ガキの頃、オンボロ橋が焼け落ちたやろ。たくさんの花火といっしよに。

男3 ああ。

男2 あれ俺やねん。

男3 ほんま？

男2 連れといっしよにな、花火いっばい橋にくくりつけて花火大会や言うてたら、

花火といっしよに橋まで燃えてしもうた。

男3 あれ、自分なん。

男2 せやねん。知ってるやろ。

男3 知ってる、知ってる。なんちゅうことしてんねんて思うた。

男2 うん。めちやくちややったな。

男3 えらい騒ぎやったで。

男2 殴り殺されそうなくらい、しばかれた。

男3 そうか。

男2 せやねん。

男3 けどあれ、きれいやった。

男2 見たんか。

男3 連れといっしょに、チャリ飛ばして、見に行ったわ。アホやなあ、けどきれいなあ言うてた。

男2 そうか。

男3 きれいな満月やったし。

男2 満月？

男3 うん、なんか忘れられんねん、あの満月。すごく大きく見えた。

男2 ……そうか、それは全然覚えてない。

男1が戻ってくる。手にはカラフルなグルグル巻のストローがある。

男2 なんやねん、それは。

男1 食堂にストローはないって。

男2 どこから持ってくるんねん、そんなの。

男1 食器棚の奥からおばちゃんが出してくれました。いい人ですね、あの人。

男2 コップの方がましやろ。

男1 どっちにしても、普通のストローじゃ飲みにくいだろうからって。

男1はカップに水を注ぐ。

男1 暑いですね。

男2 お前はな。

男1 仲直りしてもらえました？

男2 え？

男1 なんかいいい感じで話してたんじゃないですか。

男2 ああ。なんかこいつと住んでた町がいつしよであることが判明してな。

男1 へえ、そうなんですか。

男3 はい、ありがとう。(と男1が注いだコップを取る)

男1 ……。

男2 (男3に) 自分、こいつのど乾いてんねんから、すこしは思いやれや。

男3 だって、これ俺のコップやし。

男2 だから、それはええやんか、もう。

男3 なんでやねん、あかん言うてるやろ。

男2 そういう細かいこと言うてる場合ちゃうやん。

男3 それとこれとは別や。だいたい自分ら、なんで平気なん？

男2 だれでも平気やっちゅうねん。

男3 変態や、自分ら。

男2 お前に言われとうないわ。

男3 は？

男1 はい、はい、はい。そうですね、それ飲んでください。僕これ使いますから。

男3 そうやろ、やっぱ気持ち悪いやろ。

男1 まあ、理解はできます。

男3 ほら、みてみい。

男1 まあまあ。(と別のカップを手取る)

男2 ……ああ、自分さ。

男1 はい。

男2 別にええねんけどな。

男1 はい。

男2 別にええねんけど、それだった今俺が使うたし。

男1 これですか。

男3はギターを鳴らしてる。

男2 そう。自分の、これなんちゃう？

男1 僕は気にしませんけど。

男2 ああ、そう。

男1 あ、じゃあ、こっちで。(と別のカップを取る)

男2 いや、別にええねんで。俺はもともと気にしてないし。

男1 はあ。

男2 いや、全然。ああ、忘れてくれ、今言うたこと。

男1 まあ、じゃあ、こっち使います。(と最後にとったカップに水を注ぐ)

男2 ああ、そう。

男1 住んでた町がいつしよだったってどちらなんですか。

男2 え？

男 1 御実家。

男 3 そこや。

男 1 (男3へ振り向いて) え？

男 3 そこっちゆうか、俺んちはあっちで、オンボロ橋やったらあっちか。

男 2 ああ、あの森からなら。

男 3 けど、あれ半分くらいになってるやろ、もっと大きかったで。

男 2 じゃあ、もうちよつとあっちか。

男 1 ああ。

男 2 どうかした？

男 1 なんて言ったらいいか・・・その・・・すみません。

男 2 なにが。

男 1 いや、お二人がそういうことだったって知らなかったものですから・・・。

男 3 言うてなかったし、当たり前やん。

男 1 はい。

男 2 なんや、同情か。

男 1 いや、そんなんじゃないですけど。ちよつとびっくりしただけで。

男 2 自分の格好の方がはるかに驚きやで。

男 1 これは仕方がないじゃないですか。

男 2 はっきり言ってな、作業の時も邪魔やったで。自分は安心かもしれんけど。(男

3に)なあ。

男 3 自分、そんなにかぶったら前見えへんくなるやろ、視界狭うなって。

男1 多少は。

男3 足下も見にくそうやったし、こっちがハラハラすんねんか。

男1 すみません。

男3 休憩終わったら、脱いでくれ。

男1 僕はできれば今すぐ脱ぎたいんですけど。

遠くから乾いた破裂音。

男1 今日はよく鳴りますね。

男2 せやな。これ、音符の読み方書いたって。

男1 あ、はい。

男3 すまん。

男1はぐるぐる巻のストローで水を吸う。なかなか口まで届かない。男2は男1が水を飲むのに苦労するかたわら、自分のカップに水を注ぎぐいと飲む。男3も自分の水を飲み干す。男2は水を飲むと、いつもの場所に座り込み本を開く。男3はギターを鳴らす。

女1は男1が水を口にできないうちに入ってくる。両手には水の入ったペットボトル。

女1 (怪訝そうに男1を見ながら) すみません、いいですか。

男1 (ストローから口を離せず表情で返事をする)

女1 はいつものように水を補給しはじめる。男2は読んでいた本をそつと隠して立ち上がる。

男2 お疲れとん。

女1 何を言ってるんですか。

男1 (笑ってしまう←水がカップに戻っていく)

男2 聞きたいことがあんなんだけど。

女1 なんでしょう。

男2 昨日の二人はどこ行ったん？

女1 誰ですか。

男2 昨日の二人や。俺達が待ってるあいだに作業してた太った二人や。

女1 ……いませんか。

男2 昨日食堂で見かけてから、いなくなってるんだけど。

女1 さあ、わたしは知りませんが。

男2 なんでやねん、知らんことないやろ。

女1 ……わたしはこの他にも二十近くのキャンプを回っているんです。作業している方を一人一人把握してるわけではないですから。

男2 事務所の隣りやで、ここは。しょっちゅう顔合わせてるやん。

男1 今朝荷物をまとめて帰ったんじゃないですか。

男2 帰った？ なんで？

男1 さあ。後ろ姿を見ただけなので、まだ暗かったし。

男2 (女1に) 首か、あいつら。

女1 …… 契約が切れたから、帰っただけです。

男2 契約？

女1 昨日の作業で彼らの仕事は終わっただけです。だから今朝キャンプを離れて帰っていきました。

男2 更新は？ 更新するんちゃうの？ まだ作業はいくらでも残ってるやん。

女1 そこまではわたしにも、分かりません。上が決めることですから。

男2 人手は足りんはずやろ、これだけのもんを処理するには。

女1 だから、わたしには分かりません！ 本当に。わたしにも知らされないんです。ある以上のことになるよ。

男2 そう……。

女1 (不安そうな表情を見せて) 最近、契約が切れても更新しないというケースが増えていて、キャンプの数も減ってきているんです。ただ、それがなぜかは分かりません。

沈黙。女1は男2が隠していた本を見つけ拾い上げる。

男2 あ。

女1 ダメなもののはダメですから。

男2 ラオウが怖いんやけど。

女1 意味が分かりません。見逃してるのはうちの佐藤ですか、昨日といい、今日と
いい。(と本を持って出ていこうとする)

男3 おい。

女1 ……なんでしょう。

男3 悪いけど、俺は契約が切れても帰らへんし。

女1 それは無理です。

男3 こいつ(男1)みたいに、ボランティアでいるわ。

女1 それでも無理です。

男3 なんでやねん。

女1 ボランティアだから勝手にいいわけじゃないんです。ちゃんと申請をして、
許可を受けないと……

男3 じゃあ、頼むわ。許可くれ。

女1 わたしが決めるんじゃないんです。書類を本社と軍に送って……

男2 自分。

女1 え？

男2 ……よう、やんな。楽しいか。

女1 それがわたしの仕事ですから。

男2 自分、楽しみとかある？

男3 音楽好きか？

男2 詩は？

男3 詩はあかん。嘘やし。

男2 いい加減、その偏見も捨てろや。

男3 偏見ちやうわ。

男2 読んだことないやろ、詩。

男3 ない。

男2 自信を持って言うな。だいたい、思い込み強すぎんねん。

男3 なにそれ。

男2 読んだこともないくせにな・・・ちよつとは読んでみい、考え変わるし。で、お前(男1)はなにしてんねん。(とヘルメットを殴る)

咳き込む男1。

男1 水を・・・。

男2 昼休み、終わんで。

女1 頭が痛くなってきたんですけど、もう戻ってもいいですか。

男2 おお。

女1、去っていく。

男2 (女1の去り際に) ああ、せや。

女1 (立ち止まる)

男2 今晚、詩の朗読するし。

女1 は？

男2 来い。

女1 そんな暇ありません。（と去っていく）

サイレンの音

男2 よし、じゃあ、行こうか。

その日の晩。舞台には男たちがいる。厚い雲にさえぎられて月の光が届かず、舞台は暗闇のままだ。

男2 明るくなるまで待ってな。

男1 テントの電気、つけましょうか。

男2 せやな、つけてきて。

男1 はい。

ゆっくりと月の光が舞台を照らし出す。

男2 ああ、出た、出た。

男1 あ。

男2 けど、念のためつけといて。

男1 はい。

男1が建物のなかへ入って行って間もなく、テントに吊られていた裸電球に灯がともる。

男2 (男3に) おい。

男3 なんや。

男2 起きてんのか。

男3 起きてるわ。

男1 意外と興味津々ですよ。

男3 すぐ寝んで、終わったら。

男2 お前も読めよ。

男3 何を。

男2 詩。

男3 いややわ。そんなやつたら戻るわ。(と立ち上がる)

男1 (男3を制止しながら) 気が向いたらでいいじゃないですか。無理矢理ってことじゃないでしょ。

男2 強制や、強制。

男3 (立ち上がる)

男1 (男3を制止しながら) 冗談ですよ、冗談。どうしてそう刺激する言い方をす

るんですか。

男2 だっておもしろいし。

男3 なめとんのか。

男1 雰囲気、雰囲気。これじゃ昼間と変わらないじゃないですか。僕らが詠むかどうかは別として、とりあえず、ね、聴きましょう、せっかくなんだし。(男2に)じやあ、とりあえず、そういうことで。

男2 はいはい。それでは、始めます。

月の光が消える。

男2 始めようかというのに。

男1 それじゃあ、こっち(テント)のなかで。

テーブルをテントのなかへ運び込もうとすると月の光が戻ってきた。男2はテントの外に立つ。そして持っていたノートを開き、詩を朗読する。

旅人はなにも語ることなく

町を通り過ぎるだけだ

遠くを

町の喧騒を横目に

無表情に

一瞬目が合っても

僕らは彼の後ろ姿を見送ることしかできない。

見送ってそのあとは

ふたたび饒舌に世界を切り取り

肯定したり否定したり

僕らがそうしかできない理由は

僕らが旅を知らないからだ

饒舌に語れば語るほど

真実は遠ざかるのに

僕らに旅人になる勇気を

沈黙。

男1 (かなり感じ入って) ああ、そうなんだ。

男2 これ戦争が始まる直前ね。

男1 うん、うん。

男2 町の空気の緊張が、本当にピリピリとしてて・・・

男1 いろんな情報が入ってくるんですよね。

男2 テレビ、インターネット、新聞・・・そしてラジオも。おなかいっぱいになん

ねんけど、そのわりにはせやからどうやねんちゆうのがあいまいで。

男1 (納得して) それでだまって町を去る旅人なんですね。いいじゃないですか、その・・・対比っていうんですか。なんかいいですよ。(男3に) ねえ。

男3 ……じゃあ、おやすみ。(と立ち上がる)

男1 え、そうなんですか。どうして、どうして？

男2 なんや、あかんのか。

男1 なにもしやべらない旅人ですよ。スナフキンみたいでかっこいいじゃないですか。

男3 ……くもや。

男1 え、蜘蛛？ どこですか。(と地面を探す)

男3 ちゃうわ。空に浮かぶ雲のことや。

男1 (空を見上げる)

男3 アホか。旅人のことや。空を見上げて書いとんねん、旅人。

男1 え、雲？

男3 そうやろ。

男2 せや。

男1 あ・・・なるほど。しやべらない・・・雲・・・旅人。そうなんですか。

男3 まあまあやねんけどな、ちよつとセンチ入りすぎやな。

男1 そうかなあ。ちよつと厳しいんじゃないですか。

男3 ことばで説明されるようじゃあかんねん。音楽も詩も。

男1 そんなに言わなくても。

男2 まあ、よく言われんねんけどな。

男1 え。

男3 もうネタ切れなんやったら、戻るけど。(と立ち上がる)

男1 そんなことないでしょ、まだありますよね。

男2 え、ああ、あるけど。

男1 聴きましょうよ。僕はなんか、いい感じなんだけどな。

男3 は少し男2から離れたところに座りなおす。男2はノートを開いて読もうとするが、読まずに男1に渡す。

男1 え？

男2 ここにあるの、ちよつと読んでみ。

男1 自分で書いたんですから、自分で読めばいいじゃないですか。

男2 ええから。人が詠むのを聴いてみたいねん。

男1 恥ずかしいですよ。

男2 お前が書いたんちやうやん。

男1 そうですけど・・・。

男3 終わり？(と立ち上がる)

男1 あ、はい。じゃあ・・・。(とノートに目を落とす)

男2 そのページの。

ためらいながらも男1はそのノートにある詩を朗読する。

四角の箱のなかにいるんだ

四角の窓をくぐり 四角のバルコニーに立ち

四角の建物に囲まれていることを知ったよ

遠く南は煙に包まれていたよ

名前も知らない二羽の鳥が向いのバルコニーに死んでいたよ

にわか雨だからと期待したが虹は気配すら見せなかった

四角のバルコニーから 四角の窓をくぐり

四角の箱のなかにいるんだ

消えた町 歌わない鳥 見えない虹

沈黙。

男2 くらっ！自分でいうのもなんやけど、くらっ！くらくらするほどの暗さやね。

男1 いつ書いたんですか。

男2 強制避難で集合住宅に入れられたときやな。

男1 けど・・・なんていうか・・・(とことばを探している)

男3 疎開したほうがましやったな。

男2 自分、疎開？

男 3 田舎の小学校。

男 2 絶対にそっちの方がまし。めっちゃ後悔したしな。自殺せんかったのが奇跡やな。

男 3 嫌な感じになる詩やな。

男 1 握手させてください。

男 2 は？

男 1 なんかことばが見つからなくて。

男 2 感動するような詩でもないんやけどな。

男 3 暗いだけやし。

男 2 お前はもうちよつと誉めろ。

男 1 感動とかそんなんじゃないですけど。(と男2の手を取る)

男 2 そんなんじゃない・・・のもなんか嫌やな。

男 1 なんか虚しいですよね。虚無ですよね、虚無、虚無。

男 2 まあ、そうかな。

男 3 それじゃあ。(と立ち上がる)

男 1 ちよつと、待ちなさい。

男 3 なんやねん。

男 1 (かなり怒って) あなた失礼ですよ。そうやっていちいち帰ろうとして、雰囲気壊しじゃないですか。

男 2 (男1をなだめて) そんな大げさなことでもないで。

男 1 あなたはなんとも思わないんですか。この詩については。

男2 (男1をなだめて) 感じ方は人それぞれやし、それはそれでええねんで。

男1 (男2に) あなたも黙って。なんか、ナマの声を聞いた気がします。戦争直前の不安とか、戦争中の虚無感とか・・・

男3 自分、よそもんやん。

男1 (怒って) よそもんって、そんなん関係ないですわ。

男2 まあまあ、それはそうやな。(男3に) それはちよつと言い過ぎやろ。

男1 なんかこう、なんか・・・なんですか、うわあっていう感じで。

男2 うわあって・・・？

男1 うまく言えないんですけど、うわあです。

男2 そう。なんかよう分からんけど、ありがとう。

男1 (男3にノートを差し出して) 次はあなたです。

男2 もう、ええんちやうか。

男3 もう、分かったし。

男1 いいや、あなたは分かってない。声に出して詠むということが大切なんです。そうですよね。

男2 まあ。

男1 金魚を飼ったことのない奴に、ある日金魚が水槽にプカプカ浮いて死んだときの悲しみなんて分かるはずがないんです。

沈黙。

男2 ……え、それはどういう例えなん？

男1 食わず嫌いはだめだってことです。

男3 ならそう言えや。

男1 なんですと。

男2 まあ、そう怒鳴るな。ほら、一応夜やし。

男1 (ノートを男2に見せて) これは戦争が終わってのものですよね。

男2 え、ああ。

男1 (ノートを男3に強引に持たせ) 読んでください。これはギターの師匠としての命令です。

男2 今、ギターは関係ないんちゃう？

男1 命令です。

沈黙。

男2 (男3に) すみません。そういうことなんで、ここはひとつよろしくお願いします。
ます。

男3は男1の勢いにおされて、仕方なしに詩を詠む。

僕が途方にくれる理由はこうだ

太陽の時間に全ては無になった

かたちあるものは残像となり

かたちなきものは風に連れ去られ

ひとつの歴史は終わった

だからだ

僕がさらに途方にくれる理由はこうだ

夕日が沈んで月の時間になっても彼らは蘇らない

かたちあるものの残像も

かたちなきものにおいも

土のなかに埋もれるばかりで

月夜の静けさは増すばかり

だからだ

静けさよ

世界は月の光でがらりと変わった

舞台は整った

なのに

存在は存在したという記憶に墮ちて

哀しい

沈黙。男3が詩を詠んでいるあいだに女1と女2が入ってきていた。しかし男たちは

男3が詩を詠み終わるまで女たちに気付かない。また女2の姿は男2以外には見えな
い。

第四章 「そして僕らは駆けていくしかなくなる」

女1 あの……。

男2 (女2に気付いて) あ。

男1 あ、遅い。ああ、もったいなかったなあ。すごく素敵なひとときだったのに。
もうちよつと早ければ、詩の朗読、聴けたのに。

女1 そういう用件じゃなくて……

男1 (男3に) で、どうでした？

男3 まあ……

男1 でしょ。そうなんですよ。戦争がこれ、終わってからですよね。

男2 え、ああ。

男1 住んでた町に戻っても、なにも残ってないんですね。土の下に全部埋まっちゃ
って……。けれども同時に地雷も埋められていて、戻るに戻れない、と。

男2 (女1に) どうかしたんか、なんかあったか。

女1 みなさんにお知らせがあります。

男2 なんや。

女1 ……契約の打ち切りです。

男2 は？

女1 突然ですが、明日の朝、荷物をまとめて午前中には退去してください。

男3 ちょっと待て。どうということやねん。

女1 (重々しく) 政府の決定です。賃金は解約金を含めて五割り増しで全額支払われます。

沈黙。

男2 あんまし出来のいい詩とは言えんな。

男1 (女1に) なんなんですか、それは。

男3 理由は？

女1 ……地雷撤去の完了です。

男2 嘘をつけ。そんなに早くできるか。

女1 国際条約で地雷を埋めるときにはその場所を記録しておくことになっていて、その記録がやっと公開されたんです。今日の昼間に処理の音が多かったのはそのせいだそうです。

男3 (野原を指して) ここはどうなんねん。

女1 詳しくは知りません。ただ、確認作業のために軍が調査するとか。

男3 俺らは入れんのか。

女1 だから…明日の午前中に退去です。無理に決まってるでしょ、一般人は。

男3 なんでやねん。ここは俺らの…

男1 おかしい。

沈黙。

男1 それはおかしい。おかしいですよ。

女1 なにがですか。

男1 契約を一方的に打ち切るのに、十分な説明がなされていない。しかもすぐに出て行けなんて、そんな理不尽なことがあるはずがない。ここで働いている人は一応公務員扱いでしょう。それならなおさらです。（男2と男3に）訴えましょう。

女1 無駄でしょ、それは。

男1 どうしてですか。

女1 ……訴えたければ、訴えればいいでしょう。こんな混乱した時に裁判起こしても、判決が出る頃にはすべて終わってますよ。あなた、勘違いというか、もつと現実を見なさい、しっかりと。約束事がそのとおりに守られるのなら、わたしたちはもともとこんな目にあうわけがないんです。東に住んでいる人には関係ないですけど。

男1 ……。

女1 あと、あなたは配置替えされます。希望されてましたよね。室内での作業をしてもらうことになりました。「社会問題研究会」のみなさんもいっしょですから・ ・ ・良かったですね・ ・ ・（男2と男3に）ここを退去したら次の新しい仕事を優先して斡旋するそうです。それが決まるまでは失業保険もありますから。

男1 金じゃないんだ。

女1 え？

男1 分かりませんか？金・・・お金も大切でしょうけど、彼らはそれだけじゃないんです・・・

男2 おい、うるさい。もう、ええから。

男1 ……けど、こんな一方的に・・・

男2 分かったし、もう、な。

男1 人の気持ちも分からずに・・・自分勝手すぎる・・・

男2 よし、じゃあお開きだ。

女1はその時、男1の頬をぶつ。

男1 ……。

男3 もう寝る。おやすみ。

男2 おやすみ。

男3去る。女1も去ろうとする。

男2 (女1に) おい。

女1 (立ち止まる)

男2 ようやってくれたと思うわ・・・お世話になりました。

女1 ……ごめんなさい。(と去っていく)

男2 ……あいつに当たってもしやあないし。

男1 え？

男2 あいつはあいつで複雑やねん、きっと。

沈黙。

男1 じゃあ僕も失礼します。

男2 おう。

男1 ここに来て良かったです。

男2 そうか。

男1 詩なんてまったく興味がなかったのに・・・

男2 本来の仕事とは関係ないけどな。

男1 今晚、詩が存在する意味が分かった気がします。

男2 それは買いかぶりすぎや。もつといい詩を読め。

男1 はい。じゃあ・・・おやすみなさい。

男2 おう。

男1 去る。

女2 運勢が悪いのね、きっと。

男2 なにが？

女2 どうしてあなたの状況はこうも絶望的なのかって考えてたのね。

男2 うん。

女2 戦争のせいとか、戦争を起こした政府のせいとか、政府を止められなかったメディアのせいとか、そもそもそんな政府を選んだわたしたちのせいとか・・・いろいろ考えてるとね・・・

男2 結論は運が悪かったって？

女2 あえて言うならね。

男2 お前らしくないな。

女2 なにが？

男2 絶望なんてことば。ハッピーの正反対やで。

女2 分かってないわね。絶望は絶望でいいのよ。そこからどうするかっていう話でしよ。ハッピーは正反対じゃないのよ。せいぜい裏表よ。

男2 (微笑んでいる)

女2 けどそれどころじゃないわね。

男2 俺も寝るわ。

女2 うん。

男2 今日は疲れた。

女2 うん。

男2 また話をしよう。

女2 そうね。お話ししよう。

男2 去る。そして女2は独りになる。

最後の日の朝。明かりがつくと男3がギターを弾いている。前日より少し上達したのか、たどたどしくながらもなにかのメロディーを奏でている。男2が入ってくる。

男2 おう。

男3 おう。

沈黙。男3はギターを弾く手をふと止めた。

男3 なんやねん。

男2 なにが？

男3 なんの用やねん。

男2 別に・・・用がないと来たらあかんのか。自分はどうやねん。

男3 ・・・荷物まとめは終わったんか。

男2 終わった。

男3 終わったんか。

男2 なんや、自分まだなんか。なにしてんねん。どのみち追い出されんねんで。

男3 帰んのか？

男2 帰らへんのか？

沈黙。

男3 (野原を見て) どう、あっちの方は。

男2 あっちって・・・？

男3 どうせ最後なんやし、行けるところまででも。

男2 なんのことやねん。

男3 (野原を見続けている)

男2も沈黙のまま、男3につられて野原を見続ける。しばらくすると男1が入ってくる。

男1 おはようございます。

男2・3 ……。

男1 いい天気ですよね。

男2・3 ……。

男1 夕日みたいな朝日で。

男2 なんでやねん。

男1 え？

男2 どうみても朝日そのものやろ。どこが夕日やねん。

男1 いや、なんか見分けがつかない感じじゃないですか。どっちにしろ同じ太陽やし。

男2 んなことあるかい。

男3 朝日丸出しや、まぎれもなく、一日のはじまりの。

男1 はあ。

沈黙。

男2 ちよつと頼みがあんねんけど。

男1 はい。

男2 なんか切るもん持ってきてくれ。

男1 は？

男2 ナイフとかカッターとか。

男1 どうして・・・あ、ちよつとやめて下さいよ。

男2 なにがやねん。

男1 そりゃ理不尽なことになってしまつて悔しいのは僕もいっしょですし、分かり
ますけど、まだ人生長いんですから、せつかく生き延びたんだし。

男3 アホか、自分。

男1 え？

男3 こんなところで死んでどうすんねん、ちやうわ。

男1 じゃあ、なんですか。

男2 これ(赤い線)切んねん。

男1 どうして。

男2 そもそも境界線があるつちゆうのがおかしい。

男3 おかしい。

男1 いや・・・切ってどうするんですか、そんなもの。

男3 自分ちまで行く。(と野原を指す)

男2 俺んちはこっちや。(と別の方向を指す)

男1 は？

男3 どうせ戻ってこれへんのやろ。最後なんやし。

男2 せつかくなんやし。

男1 ……ちよつとなんですか。何を言ってるんですか。行けるわけないでしょ。

男3 地雷はないんやろ。

男1 あるかもしれないじゃないですか。

男2 撤去は完了したって言ってんやろ。ちゆうか、もともとあったんかどうかも疑わしいしな。

男1 いや・・・

男3 実際この手で処理したことなかったし。

男2 煙も見えたことなかったし。

男1 けど、確証はないでしょ、どちらにしても。

男3 地雷って卑怯やな。

男1 は？

男3 不安だけはいつまでも残し続ける。

沈黙。

男2 まあ、けど行けるやろ。

男1 どうして。

男2 昨日までの作業で・・・まっすぐに行けば大丈夫なはず。それは自分自身の手で確かめたことやし。

男3 せやな。

男1 無茶です。

男2 なにも自分に行けと言ってるんとちゃうやん。

男3 切るもん借りてきてくれや。とりあえず。

女1が入ってくる。

男1 あ・・・おはようございます。

女1 ……おはようございます。

男2 おう、どうした。

女1 これ(水のタンク)を回収しに来ただけです。

男2 そう・・・自分な。

女1 はい。

男2 佐藤さんにな、俺の詩集をあげてんか。

女1 そうですか。

男2 二冊あるし、一冊やるわ。

女 1 ……ありがとうございます。

男 3 あとな。

女 1 なんですか。

男 3 切るもんある？

男 1 ちよつと……。

女 1 なんですか。

男 3 カッターとかナイフとか。

男 1 (口をはさんで) いいんです。

女 1 なにをするんですか。

男 2 これを切んねん。

女 1 ……。

男 1 そんなことできるわけないですよね。

沈黙。女 1 はポケットからナイフを取り出し男 2 に渡す。

男 2 サンキュ。

女 1 (去る)

男 2 は男 3 にナイフを渡す。男 3 はそのナイフで舞台と観客席の境界線を切る。

男 1 ああ……。

男3 このまま街に帰っても死んだままやねん。

男1 え？

男3 命は助かった。生き延びた。そしたら新しい住むところももらって、仕事は少ないけど、救援物資はけっこう届くし・・・けどな、街にいても生きた心地がしいひんかってん。どうしてなんやろ、分からんけど。たいていの奴はそうやねん。俺は音楽やっというのは分かってる。これで世界に立ち向かえばええねん、俺はな・・・(野原を見て)ただな、その前に確かめときたくてな。出ていく前に。

沈黙。

男2 どうせやったら、自分ちに寄ってそのまま森まで行こか。

男3 ええな。けど森まで行くんやったら・・・せつかくやし・・・

男2 森を抜けて湖に出るか。

男3 そうしよう、そうしよう。

男2 けど残ってんのかな、今も。

男3 あつたらええねんけどな。昔のままに。

男2 せやな。

男1 あの・・・

男2 なんや。

男1 僕、朝起きた時、思いついたんです。

男3 なんや。

男1 音楽に詩をのつけて、歌にしたらいんじゃないかって。

男2・3 は？

沈黙。

男1 僕もいきます。

男3 自分関係ないやろ。

男1 地雷は大丈夫なんですよね。

男2 ええねんで、自分は。別に。

男1 (強く) 確認したんですよ。

男2 ……まっすぐ直線で行けば、まあ、十中八九な。

男1 僕もいきます。

男3 せやし、なんでやねん。

男1 森を歩いたことがないんです。湖を見たことも。せっかくだから見てみようと思っ
って。

男2 なんで観光やねん。言うても、危ないで。

男3 やめとけ。

男1 死ぬつもりですか。

男2 え？

男1 自殺するつもりですか。

男2 そういうつもりは……

男3 (強く) 死なん、絶対に。

男1 だったら・・・それ、信じます。

男2 サークルのメンバーは？ ほら、社会問題なんかの。このまま帰ったら会えるやん。

男1 誰かに監視されながら？

沈黙。

男3 急に、わけ分からんわ。勝手にせえ。

男2 変わったな、自分。

男1 え、そうですか。

男2 やっぱりこんなところ来んほうがよかったんちゃうか。

男1 何を今さら。

男3 ほな、行こか。(とテーブルを隅に移動しはじめる)

男1 え・・・。

男2 なにしてんねん。

男3 (テントの奥を指して) そっからや。

男2 なにが。

男3 よーい、ドンでスタートすんねん。

男1 走るんですか。

男2 (笑って) なんでやねん。

男3 ええねん、こういう時は。こういう時はダッシュでええねん。

男1 普通に一步一步歩いていけばいいじゃないですか。そんな冒険しなくても。

男3 ちまちましたスタートじゃあかんねん。勢いよく行かんと。

男1 勢いよくって……。

男2 じゃあ、その境界線のところを踏み切り線として、大きくジャンプして飛び出すということ。

男3 よし、それでいこう……。なんや行くんか、行かんのか。

男1 あ、行きます。行きますけど、そんな思いつきとは想像してなかった。

男2 ほな。

男たちはテントの奥で走り出す位置につく。男3はギターを片手に持つ。

男2 なんや、持って行くんか。

男3 これは離せん。

男2 面倒臭いな。

男3 放つとけ。

男2 けど……。あれやな。詩を音楽につけて歌にするって……

男1 え？

男2 おもしろいな。歌。(男3に) どう？

男3 さあ……。まあ、ええかもな。

男2 歌いながら行こか。

男 3 うん。

男 2 歌うんやで。

男 1 え、歌ですか。

男 2 自分が言うたんやんか。

男 1 あ、はい。

男たちの表情は緊張している。

男 3 じゃあスタート出せ。

男 1 僕が？

男 3 いいから出せ。

男 2 とんだとぼっちりやな。

男 1 はい。

男 2 なんや嫌なんかい。

男 1 うそです。じゃあ・・・行きます。

男 3 よし来い。

男 1 よーい・・・

即暗。

男たちは野原へ飛び出していった。果たして彼らの目的が達成されたのかどうかは分

からない。しかし確実に言えることは彼らは飛び出したということだ。飛び出す直前、彼らが野原を見つめるその表情は希望に輝いているものでもなく、けれども不安を隠しきれないものでもなく、ただ前をしっかりと見定めるだけの表情だった。前を見ているだけの表情だが、それはとても印象的でありたい。

エピローグ「(無題)」

舞台が明るくなると、女2がいる。女はノートをパラパラとめくっている。特に注意を引かれるページもなさそうで、後半の余白のページはさらに早く流してそのまま裏表紙を閉じる。しかし、最後の最後に女は見つける。ノートの最後のページから上下逆さまに、文章が書かれてあったのを女は見つける。女はその文章に軽く目を通して、それからゆっくりと読みはじめる。

女2 「あいつの言うことがなんとなく分かる気がしたが、よくよく考えてみるとやっぱりよく分からない。ハッピー、トランポリン、軽さ、がらりと変わることに、満月・・・はもともとその時が満月だったからということ、どうでもいいのだろうけど。なんとなくというのは、想像することはできるということだ。頭では分かるということだ。」

女はノートのページをめくる。

女2 「人生を悲劇で見るか、喜劇で見るかということなのだろう。たとえそれがどんなに面白可笑しい状況であっても、もともとが悲劇なのならそれはやっぱり重いということ。これが喜劇なのなら、軽いということなのだろう。アリストテレスの喜劇論でも読めば分かるのだろうか・・・そんなものがあればの話だけど・・・関係ないか、別に。あいつの言うことが結局はよう分からんというのは、それが理想で現実にはありえないことのように思えるからだ。」

女は次のページに目を移す。

女2 「ああ、そうか。違うのかも。再発見だ。あいつに理解されたかどうかは知らんが、もしかしたら、これから探しに行く俺んちの跡から何かを見つけて、俺自身の再発見ができれば、なんかあるかも。軽く舞い上がるための場所をそこに見つけるんだと思う。」

女はノートのページをめくる。

キャンバスは白のまま

月の光に照らされ

夜風にあたって

触ってみると微かに湿って

紙の感触

満天の星空を見ても

完璧な満月を見ても

まったくの静けさのなかにいても

夜風をすべての皮膚で感じ取っても

キャンバスは白のまま

コーヒーもすっかり冷めて

俺は筆を置く

一番下の引き出しを開けて

整理されずにぐちゃぐちゃの手紙がいっぱい

何も手を触れずにまた閉めた

月がうす雲に隠れた

熱いコーヒーが飲みたかったから

カップを手に取り

カップを片手に引き出しをもう一度開けた

そのとき思い出した

しごく単純で明解な事実だ

突然女は詩を詠むのをとめる。うつむいた女の表情は一瞬泣いているようにも見えだが、優しく優しく微笑んでいる。女は再び詩を詠みはじめる。(次の「そのとき思い出した しごく単純で明快な事実だ」は反復として詠まれる)

そのとき思い出した

しごく単純で明快な事実だ

そこに埋まるものはたしか

歴史という俺とお前の思いだ

女はノートを閉じてテーブルの上に置く。そして野原を遠くに見る。

【了】